【48】

氏　名（本籍）	川　井　博　義（愛 知 県）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　4188　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**存在と愛－萬葉人の思惟と行為の研究－**

主　査	筑波大学教授	文学博士	伊　藤　　益
副　査	筑波大学教授	文学博士	笹　澤　　豊
副　査	筑波大学教授	文学博士	佐　藤　貢　悦
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	芳　賀　紀　雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は，萬葉人の思惟と行為の根本様式を，「存在」と「愛」という視点から究明するもので，十の章によって構成されている。

序章において，著者は，本論文の目的が，「存在」と「愛」とに対応する倭語を分析することによって，日本的思惟と行為の根源的態様を闡明しようと企てるものであることをあきらかにする。第一章「原点としての『われわれ』」は，そうした目的を果たすための予備的作業として，前期萬葉における「われ」の用字に着目し，それが「吾等」と表記されることが多いという事実から，萬葉人は「われ」が複数的に在ること，すなわち「われら」が共に在ることを以て「在ること」（存在）の原点と考えていたことを究明する。第二章「時の連続と『われわれ』」は，第一章を受けて，共在（共に在ること）ととらえられた萬葉人の「存在」が，過去・現在・未来という時間性に貫かれたもの，すなわち「共存」であったことを闡明する。かくして，著者によれば，萬葉における「存在」とは「共存」「共在」の謂いであったことが明確になる。ただし，「共存」「共在」は，萬葉人の精神的紐帯ともいうべき「すめろき」の時間的な可逆性によって支えられており，そうした可逆性への能動的参与の可能性が保証されえないとき，「存在」は大きなゆらぎを示すと第三章「『存在』のゆらぎ」は説く。第四章「知の位相と『存在』」は，著者が以上のように究明してきた「存在」を萬葉人が知的位相においていかに受けとめたのかという点を論究するもので，主に，大伴旅人と大伴家持の「知」の在り方を比較検討する。第四章の考究によれば，旅人の「存在」に関する知が体感・体得としての知であったのに対して，家持のそれは理知的な対象認識であったという。著者は，続く第五章「『存在』と『イヘータビ』」において，こうした旅人と家持の知の位相の相違を，萬葉集に通底する「家」「旅」対比の構造に着目することによってきわだたせようとする。すなわち，著者によれば，「タビ」という「汝」非在の情況において旅人が逆説的に「存在」を体感・体得したのに対して，家持はあくまでも観念の上に「イヘータビ」関係を措定しつつ「共存」「共在」としての「存在」を理論的に把握したのだ，という。第六章「『存在』の自覚」は，「共存」「共在」として「存在」をとらえていた家持が，眼前の景のなかに自己自身がいないという現実に直面し，そこに「存在」を否定する「非在」を見据えたことをあきらかにする。「非在」への視座は，「非在」の孤絶性を浮き彫りにしつつ「存在」への鮮明な自覚を導いてゆくと著者はいう。

第七章「『愛』から「こひ」へ」は，人間相互の情愛としての「愛」が共に在ることとしての「存在」を保証するものであったことを闡明するとともに，「愛」という情緒に対して「こひ」の意識がより尖鋭化するに至ったとき，「共存」「共在」をめぐる萬葉人の思考が，共に在ることから離脱した他者の悲しみ，すなわち孤りの悲しみを，自己のものとして共悲する心的態様となってゆく過程を追う。こうした第七章の考究を受けて，第八章「歌うこと・『存在』・愛すること」は，「存在」を「共存」「共在」と見定めていた萬葉人にとって，愛によって保証される「存在」は，愛をうたう具としての歌を以て基礎づけられることになると主張する。以上九章にわたる考究を踏まえながら，著者は結章「存在と愛」において，萬葉以来の伝統に立つわれわれ現代の日本人にとって，「存在」と「愛」とが不可分の関係に置かれることが，当為であり必然でもあると論ずる。「存在」とは個が単独に在ることではなく，他の個と共に在ることにほかならないと考える著者にとって，「共存」「共在」の原拠としての愛は，そのまま直ちに存在であり，また存在は愛以外の何ものでもない。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来の倫理学において，個人と共同体，すなわち個と種の問題が論ぜられる場合，種に先立って個が存在し，その個が他の個たちとのあいだに関係を取り結ぶことによって種が成り立つと考えられてきた。種に対する個の先在性を強調するこうした考えかたは，近代的な個の自覚をきわだたせるものとして，一見至極妥当なもののように見える。しかし，実際に個人が共同体との関係を結ぶに至る具体的な場面に着目してみると，こうした考えかたはかならずしも妥当なものであるとはいえない。というのも，わたしたちが個として在るためには，他の個から生まれでなければならず，しかも生まれでる場（たとえば産院）は，すでにそこで複数の個のあいだに錯綜した関係が営まれている種的な場にほかならないからである。このような個の生成（出生）という事態を顧慮するならば，種に対して個が先立つとはいえない。逆に，むしろ種が個に対して先在するというべきであろう。本論文は，萬葉集を主たる考究の対象としながら，このような種の先在性を究明することによって，在来の倫理学に新たな視点を付与するものとして高く評価することができる。わけても，萬葉人の思惟のなかに種的に共在することを存在と認定しようという志向性が儼存し，しかもそれが愛の観念に裏づけらつつ尖鋭化されたという著者の指摘は，従来の日本古代思想研究に新たな地平をもたらすものといえよう。

ただし，個と種の問題を論ずるにあたって類（普遍者）に言及しない点において，本論文は若干の難点をもつ。個と種との関係は，類をも含めた三項構造のなかで弁証法的にとらえられるべき問題だからである。本論文は，類を論じないために，個と種とのあいだに存する相互媒介の関係をかならずしもあらわた示しえていない。しかし，これは萬葉集における類的普遍の非在がもたらしたやむをなえい問題点と考えることができよう。大乗仏教の広汎な展開は萬葉以降の時代に属する事柄であり，著者は大乗仏教において類概念が披瀝されうるという見通しのもとに本論文の論説を組み立てており，類の問題が著者の視野に入っていなかったとはいえない。従来の倫理学研究では，「存在」の問題から切り離された「実践」の問題としてのみとらえられていた愛を，存在論との密接な関連のもとにとらえた著者の考究は，かりに類概念への論究を顕在化させていないとしても，新知見を披瀝する斬新な研究として高く評価することができる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。